

研究主題

豊かな心を育む道德教育の創造

～ 「特別の教科 道德」（道德科）を見据えた指導方法の工夫 ～

北九州市立藤木小学校

校長 大竹 ひとみ

<論文要旨>

キーワード：豊かな心、自己の生き方の自覚を深める道德の時間、
多様な指導方法の工夫、体験活動を生かした指導方法の工夫、
問題解決的な学習「考える道德」「議論する道德」

平成27年7月、文部科学省より小学校学習指導要領解説（特別の教科道德編）が発表された。道德科の授業においては、子どもが主体的に考え、議論する道德科への転換を意図している。このような新しい道德教育の動きや社会の要請、本校のこれまでの研究の成果と課題から、研究主題「豊かな心を育む道德教育の創造」副主題「『特別の教科道德(道德科)』を見据えた指導方法の工夫」を設定し、継続研究を行った。全教職員で共通理解を図ったことは、いかに道德が教科になろうとも、授業を行う上で重要なことは、①道德科の目標を意識して授業を各教科等との関連を図りながら構想すること ②明確な目標を設定すること ③問題解決的な学習や体験的な学習（アクティブ・ラーニングの充実）を取り入れた学習展開を構想すること である。これらを踏まえ、研究仮説及び手立てを以下のように設定し、PDCAサイクルを重視した授業実践を校内研究で行った。

研究仮説・・・道德の時間において体験活動を生かした多様な指導方法の工夫を行うならば、自己を見つめ、道德的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、豊かな心を育むことができるであろう。手立て1 教材選定・提示の工夫、手立て2 発問の工夫、手立て3 言語活動の充実、手立て4 板書の多様化・構造化、手立て5 家庭や地域社会との連携を図った学習指導、手立て6 各教科等との関連を図った学習指導を基に実践を行った。

成果として、問題解決的な学習や体験的な学習を取り入れるなど指導方法を工夫したことで、子どもが自分自身の問題として捉え、主体的に考え、議論し道德的価値の自覚が深まった。

課題は、手立ての焦点化である。来年度は、自己対話や他との交流が生まれる発問の工夫に絞った研究を行う。そのため、まず板書と発問を結んだ指導案を工夫したい。

<目次>

I 主題設定の理由	3
1 社会の要請から	
2 「特別の教科 道徳」(道徳科)の実施に向けて	
3 本校のこれまでの研究の成果と課題	
II 研究主題の意味	4
1 研究主題の「豊かな心」について	
2 研究副主題の【「特別の教科道徳」(道徳科)を見据えた指導方法の工夫】について	
III 研究の仮説と構想	4
1 研究の仮説	
2 研究の構想	
IV 研究実証のための方策	5
1 道徳の時間の多様な指導方法の工夫	
(1) 教材を拓く	
手立て1・・・教材選定・教材提示の工夫	
(2) 方法を拓く	
手立て2・・・発問の工夫	
手立て3・・・言語活動の充実(話し合い活動、表現活動、書く活動)	
手立て4・・・板書の多様化・構造化	
2 体験活動を生かした指導方法の工夫	
(1) 人間を拓く	
手立て5・・・家庭や地域社会との連携を図った学習	
(2) 時間を拓く	
手立て6・・・各教科等との関連を図った学習指導	
V 校内研修の年間計画	6
VI 研究の実際	8
1 道徳の時間の多様な指導方法の工夫	
2 体験活動を生かした指導方法の工夫	
VII 研究の成果と課題	18
1 研究の成果	
(1) 手立ての有効性について	
(2) 子どもの変容から	
2 研究の課題	
VIII おわりに	24
《参考文献》	24

I 主題設定の理由

1 社会の要請から

我が国の社会は、国際化・情報化、環境問題への関心の高まり、高齢化・少子化等の様々な面で大きく変化しており、これらの変化を踏まえた新しい時代の教育の在り方が問われている。特に、学校においては「心の教育」を充実させ、子どもたちに生きる力の中核となる「豊かな心」を育むことが強く求められている。心の教育の要となるのが道德教育であり、その道德教育の充実がなければ子どもたちに「豊かな心」を育てていくことは難しい。そのため、小学校学習指導要領では、道德教育の目標を総則において明確化、具現化し、学校の教育活動全体を通じて道德教育を行うことが一層強調されるようになった。

2 「特別の教科 道德」（道德科）の実施に向けて

平成27年7月に改正された小学校学習指導要領解説道德編の改正のポイントとして、「考え、議論する」道德科への転換による子どもたちの道德性を育むことを柱に次の事項を示している。

- 道德科に検定教科書を導入すること
- 内容について、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに改善すること
- 問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れ、指導方法を工夫すること
- 数値評価ではなく、児童の道德性に係る成長の様子を把握すること
- 内容項目がキーワードとして示されていること

つまり、これまでの道德の時間を要として、学校の教育活動全体を通じて行うという道德教育の基本的な考え方を今後も引き継ぎ、発達の段階に応じ道德的な課題を一人一人の子どもが自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道德」「議論する道德」への転換を図ることが今回の改訂で意図されたものである。

3 本校のこれまでの研究の成果と課題

本校の年次計画

研究主題「豊かな心を育む道德教育の創造」

一年次・・・自己を見つめ道德的価値の自覚及び自己の生き方についての

自覚を深める道德の時間の指導法の工夫

二年次・・・「特別の教科 道德」（道德科）見据えた指導方法の工夫

三年次・・・「特別の教科 道德」（道德科）実施に向けて具体的方策の焦点化～発問の工夫～

本校では、昨年度から道德を主題にとり、「豊かな心を育む道德教育の創造」を研究のテーマに掲げ、「豊かな心」の育成に取り組んできた。成果として、子どもたちに少しずつ道德性が養われ、26年度の7月と12月に行った道德アンケートでは、学校教育目標の指標となる「あなたの花」（㊦いさつの花・㊦かよしの花・㊦いせつな命の花）のすべての項目で数値が上がっていた。昨年度は、福岡県小学校道德教育研究大会を本校で行ったため内容項目は限定されていなかったが、学校教育目標である「あなたの花」に関連した内容項目を重点化して深く学習していくことで、さらに道德性を養うことができるのではないかと考える。また、他教科等での体験を生かし、道德の時間との関連を図り、さらに道德的実践力が育成されるような計画を立てることが課題としてあげられたため、道德教育の重点目標に基づき、全教育活動においてどのように道德教育を行うのか指導の内容及び時期を明確にした全体計画別葉を作成し、それに基づいて手立てを焦点化しながら道德の時間を工夫していくことが必要であると考え。

Ⅱ 研究主題の意味

1 研究主題の「豊かな心」について

「豊かな心」とは、人間がよりよく生きたいという願いをもって、かけがえのない自分自身を大切にするとともに、自分と同じようにかけがえのない他との関係を大切にしようとする知・情・意の総体としての心である。

知・・・人間としてよき行為を判断する知性（道徳的判断力）
情・・・人間としてよき行為を志向する感性（道徳的心情）
意・・・人間としてよき行為を発動する意志（道徳的实践意欲と態度）

特に、下記の能力、態度の育成を重点とする。

- ①自尊感情 ②自立心や自律性 ③生命を尊重する心 ④基本的な生活習慣
⑤規範意識 ⑥人間関係を築く力 ⑦社会参画への意欲や態度 ⑧伝統や文化を尊重する態度など

2 研究副主題の【「特別の教科 道徳」（道徳科）を見据えた指導方法の工夫】について

本校は本年度、北九州市道徳教育推進事業校となった。そこで、新学習指導要領を見据えた先行実施を行うことが可能となった。

そのため、「特別の教科 道徳」（道徳科）が求める「考える道徳」「議論する道徳」への転換を図る道徳教育を実現していく為の指導方法の工夫が急務であると考え、サブテーマを設定した。

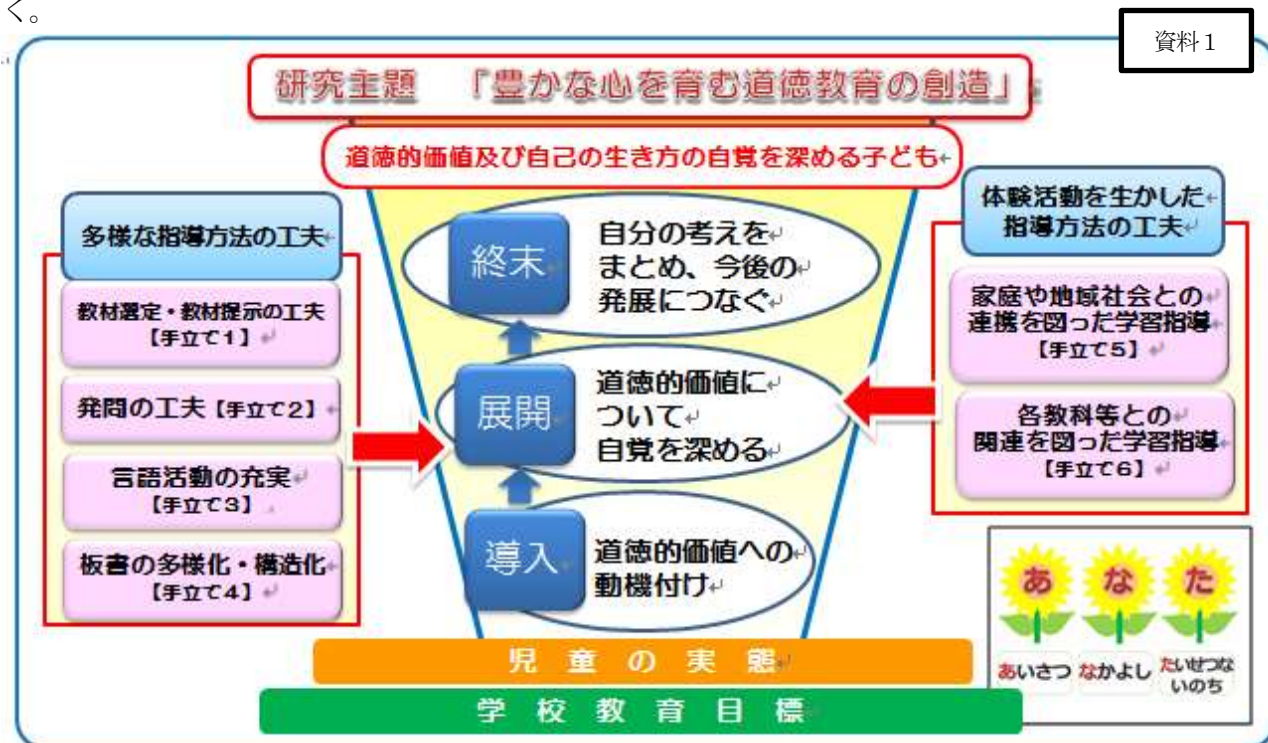
Ⅲ 研究の仮説と研究構想

1 研究の仮説

道徳の時間において、体験活動を生かした多様な指導方法の工夫を行うならば、自己を見つめ、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、豊かな心を育むことができるであろう。

2 研究構想

豊かな心を育む道徳教育の研究を行うにあたって、資料1のような研究構想をもって研究を進めていく。



IV 仮説実証のための方策

1 道徳の時間の多様な指導方法の工夫

子どもたちが、心で感じたり「自分だったらどうするか」「人としてよりよく生きるために何が必要か」深く考えたりするためには、道徳の時間が心に響くものであったり、興味をもって意欲的に取り組んだりすることが必要である。そこで、子どもたちの心に響き道徳的価値及び自己の生き方の自覚を深める授業を展開するために指導方法を以下のように工夫する。

(1) 教材を拓く

手立て1・・・教材選定・教材提示の工夫

資料2のように、本校の子どもたちの実態を考慮し、本校の学校経営の重点目標「あなたの花」(㊦いさつの花・㊦なかよしの花・㊦いせつな命の花)に関連した内容項目と新学習指導要領で新たに加えられた内容項目の中から低学年、中学年、高学年から一つずつ本校の実態に応じて選んだ内容項目を本校の重点内容項目として設定する。また、教材については、子どもの興味関心をひくもの、発達段階に応じたものを考慮し、伝記、実話、意見文、物語、詩、劇、紙芝居など多様なものを活用する。

資料2

- ㊦ あいさつの花・・・礼儀【低、中B－(8)、高B－(9)】
㊦ なかよしの花・・・友情、信頼【低、中B－(9)、高B－(10)】
親切、思いやり【低、中B－(6)、高B－(7)】
㊦ 大切な命の花・・・生命の尊さ【低D－(17)、中D－(18)、高D－(19)】



新学習指導要領で付加された内容項目

- 低・・・国際理解、国際親善【低C－(16)】
中・・・公正、公平、社会主義【中C－(12)】
高・・・よりよく生きる喜び【高D－(22)】

また、教材提示の仕方を工夫する。例えば、子どもの思考を考慮し、教材を途中で切ったり、プレゼンテーションやパネルシアターで提示したりするなどの工夫を行う。さらに、新学習指導要領で付加された内容項目の教材選定や実践を行う。

(2) 方法を拓く

手立て2・・・発問の工夫

考える道徳、議論する道徳を意識し、発問の工夫を行う。B研として模擬授業を行い、その中で、児童の意識の流れを予想し、それに沿った発問や考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問などを協議する。さらに、B研後に実践を行い、実際の子どもの思考や反応を観察した後に、再度協議し発問をさらに精選、工夫し、A研の実践に臨む。また、本校では教師が中心発問を事前に練っておくが、子どもと共に中心発問を考え提示するように工夫する。

手立て3・・・言語活動の充実(話し合い活動、表現活動、書く活動)

一人一人が自分の課題として捉え、自分の考えを明確にもつために、一人で考える時間を十分に確保し、その後、ペアやグループで話し合ったり、座席の配置を工夫して立場討議をしたりする。ネームプレートを活用し、同じ考えをもつ子ども同士が集まって話し合うなど自分の考えを明確にした話し合いを行う。また、発表する際には、話すだけでなく、発表ボードに考えをまとめたり、役割演技などをしたりして自分の考えを表現する工夫を行う。書く活動においては、ワークシートなどを道徳ノートに綴じていき、子どもの心の成長の記録としていくと共に家庭に持ち帰り、保護者と共に道徳の時間について話し合いの場をもつ工夫を行う。

手立て4・・・板書の多様化、構造化

これまでの右から左に流れる形式的な板書にとらわれず、子どもが考えやすい板書、子どもの考えが可視化されている板書を目指す。

2 体験活動を生かした指導方法の工夫

(1) 人間を拓く

手立て5・・・家庭や地域社会との連携を図った学習指導

開かれた道徳の時間を目指し、家庭や地域社会との連携を図る。地域の方や保護者、校長等にゲストティーチャーとして参加していただいたり、通常の道徳の時間を参観していただいたりするなどの取組を行う。

(2) 時間を拓く

手立て6・・・各教科等との関連を図った学習指導

本校独自の道徳教育全体計画別葉を作成し、各教科等との関連を図った道徳教育を推進する。また、本時の学習指導案には、道徳の時間と他教科等との関連を構想化して載せる。

V 校内研修の年間計画

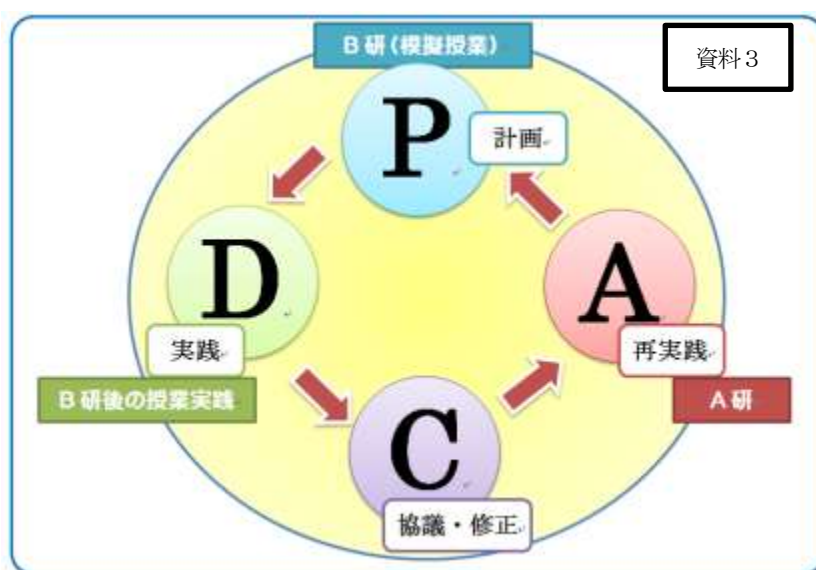
B研を模擬授業にし、職員が子ども役になって授業を進める。(写真1) その際に出てきた疑問点を協議し、発問や授業の仕方等を工夫する。B研で協議されたことを基に、隣のクラスで実践し、その際、子どもの思考の流れや反応を見て、改善点があれば、変更後の実践をA研として実践する。このように、PDCAサイクルを重視した研究を推進していくこととした。(資料3)



写真1 模擬授業の様子



写真2 協議の様子



本年度の校内研修年間計画を以下のように立てた。(資料4)

一学期	◆理論研究 (仮説, 仮説実証の手立て, 研究内容について) ◆児童の実態調査1回目 (7月) ◆研究授業および講師による指導助言				資料4
二学期	◆B研の模擬授業 (校長・教頭・教務・近接学年・同学年・研究主任) ◆B研後の授業実践 (校長・研究主任・同学年) ◆教材研究 (実践事例・研究資料の収集と分析) ◆研究授業および講師による指導助言				
	月日	学年	単元名	主な手立て	
	9/7	6年	B研 (校長・教頭・教務・近接学年・同学年・研究主任)	手立て2	
	9/8	6年	B研後の実践 (校長・教務・研究主任・同学年)	手立て3	
	9/9	6年	A研「ロレンゾの友達」【友情・信頼】	手立て4	

	9／10	3年	B研前の授業実践、B研（校長・教頭・教務・近接学年・同学年・研究主任）	手立て1 手立て2
	9／16	3年	A研「絵葉書と切手」【友情・信頼】	
	10／16 10／19	5年 5年 5年	B研（校長・教頭・教務・近接学年・同学年・研究主任） B研後の実践（校長・研究主任・同学年） A研「きまりは何のために」【公德心】	手立て3 手立て4 手立て6
	10／19 10／20 10／21	1年 1年 1年	B研（校長・教頭・教務・近接学年・同学年・研究主任） B研後の実践（校長・研究主任・同学年） A研「あいさつで しあわせに」【礼儀】	手立て3 手立て4 手立て5
	11／5 11／6 11／11	2年 2年 2年	B研（校長・教頭・教務・近接学年・同学年・研究主任） B研後の実践（校長・研究主任・同学年） A研「生きているってすばらしい」 【生命の尊さ】	手立て1 手立て6
	11／9 11／10 11／11	4年 4年 4年	B研（校長・教頭・教務・近接学年・同学年・研究主任） B研後の実践（校長・研究主任・同学年） A研「心と心のあく手」【思いやり・親切】	手立て3 手立て6
	◆児童の実態調査2回目（12月）			
三学期	◆教育研究論文執筆（検証授業の考察） ◆研究のまとめ（本年度の研究の成果と課題、来年度にむけて） ◆研究紀要作成 ◆次年度の別葉、年指導計画の作成			

下記の資料5は、第5学年の研究の一部である。このように何度も協議を重ねていくことで、授業改善を図ることができた。

資料5

	中心発問後の活動	児童（児童役）の反応	協議内容と改善点・考察
B研前 	・役割演技 3人組で、『ぼく』『明』『鉄夫』の役に分かれて話し合う。		・教材文を読み取って人物の演技をしようとしてしまい児童が自由に考えにくくなってしまっているのではないか。 ・自分の意見と異なる立場の人物の役割を演技することになる児童にとっては、考えを深めにくいのではないかと。
B研の模擬授業	・書く活動（個人の考えを付箋に書く） ・「きまりは何のためにあるのか」について自分の考えを書く。	・「きまりはみんなが楽しく過ごすためにある。」 ・「きまりはみんなが安全に生活するためにある。」	・児童役の教師だったためかもしれないが、ほとんど同じ意見になってしまい、話し合いに深まりが見られなかった。
B研後の授業実践 	・模擬学級会 ・「『きまりは何のためにあるのか』(②)という議題で、グループごとに模擬学級会をして結論を出す。 ・模擬学級会の前に、一人一人が付箋に「きまりを守るために自分がどうしたらいいか」(①)についての自分の考えを書く。	グループの結論 (②) ・「きまりはみんながこまらないためにある」 ・「きまりはみんなを傷つけないで安全に暮らすためにある」 ・「きまりは自分だけでなく、みんなにもある権利を守るためにある」 個人の意見 (①) ・「いつも意識しておく」 ・「他人のこと、みんなのことを考えて行動する」 ・「みんなにも権利があると思う」 ・「人がやっても自分はしない」	・B研の結果から、中心発問についてより多様な意見を交わす活発な話し合いとなるように、B研後の授業実践では、個人で考える際にはまず「きまりを自分が守るにはどうしたらいいか」について意見を付箋に書くようにした。 ・「きまりは何のためにあるのか」についての話し合いの前に「きまりを自分が守るにはどうしたらいいか」という別の内容について書く活動を設定したため、「難しい。」「『きまりは何のためにあるのか』についてのほうが書きやすい。」等と戸惑う児童が多かった。

A 研 A 再実践	・模擬学級会 ・『「きまりは何のためにあるのか」(④)という議題で、グループごとに模擬学級会をして結論を出す。 ・模擬学級会の前に、一人一人が付箋に「きまりは何のためにあるのか」(③)についての自分の考えを書く。	グループの結論 (④) ・「きまりみんなの安全を守るためにある」 ・「きまりはみんなの安全な暮らしを守る大切な命のためにある」 個人の意見 (③) ・「周りの人の迷惑にならないようにするためにある」 ・「きまりがないと事故やけがのもとになる」	C 協議・修正 ・「きまりは何のためにあるのか」を一人一人が付箋に書くことで活発な意見がでていた。自分の体験も踏まえて話し合うことができていた。 ・今後も日頃から言語活動を重視し他教科でも話し合い活動を取り入れていく。
---------------------------------------	--	---	--

VI 研究の実際

1 道徳の時間の多様な指導方法の工夫

(1) 教材を拓く

手立て1・・・教材選定・教材提示の工夫

道徳の資料(教材)は自己を映す鏡であると言われる。道徳の時間では、資料の中に示された人間の生き方を丸ごと提示し、自分の生き方と重ねたり、比べたりする学習活動をする中で、資料に示されている人間の生き方を手がかりにして、自分の生き方を見つめるものである。本校の子どもたちの実態に応じて、重点目標である「あなたの花」(㊦いさつの花・㊦なかよしの花・㊦いせつな命の花)に準じた内容項目を選定した。どの教材も考える道徳・議論する道徳を意識した教材である。また、子どもたちが自分のこととして課題をもち、「自分だったらどうするか」「人としてよりよく生きるためには何が必要か」考えられるような教材である。第5学年においては、高B－(10)友情、信頼の関連項目として教材を選んだ。

	内容項目	教材名
第1学年	礼儀 低B－(8) 【あいさつの花】	「あいさつで しあわせに」
第2学年	生命の尊さ 低D－(17) 【大切な命の花】	「生きているってすばらしい」
第3学年	友情、信頼 中B－(9) 【なかよしの花】	「絵葉書と切手」
第4学年	親切、思いやり 中B－(6) 【なかよしの花】	「心と心のあく手」
第5学年	遵法精神、公德心 高C－(12)	「きまりは何のために」
第6学年	友情、信頼 高B－(10) 【なかよしの花】 よりよく生きることの喜び 高D－(22)	「ロレンゾの友達」 「つかの間の出来事」

① 第1学年の授業実践・・・「あいさつで しあわせに」【低B－(8) 礼儀】

第1学年では、子どもたちが入学当初から元気よくあいさつをする姿が見られた。しかし、教師の願いとして、限られた人だけでなく誰に対しても心のこもったあいさつができるようになってほしいと思い教材を選定した。教材として「あいさつでしあわせに」を選び、心を込めてあいさつをすることで、みんなと心が通い合い、自分も周りの人も楽しくなることを学ぶことをねらいとした。

本教材は、主人公ポンタ君が会える人にあいさつをして幸せを届ける内容が、場面絵のみで描かれている。どのようなあいさつを交わすとよいのか考えさせるために吹き出しになっていたりと、朝、昼、夜のあいさつの違いも実感できたり、相手に



写真3 場面絵で教材提示

よってあいさつを変えたりすることも実感できる。集中して話を聞かせるために、教材を見せて一日の様子を一度に提示するのではなく、黒板シアター形式でペープサートのポンタ君が動きながら、出会う人とあいさつを交わす様子を表現できるようにした。(写真3)

子どもたちは、「次は、誰と出会うのかな。」と興味をもって、話を聞いたり、吹き出しの言葉を考えたりすることができた。また、ポンタ君が途中で出会う人とあいさつを交わす場面では、実際に校長先生とあいさつの練習をしたり(写真4)、ペープサートを持って役割演技をさせたりして、興味をもって取り組めるようにした。

校長先生、
おはようございます。



写真4 校長先生とのあいさつ

② 第3学年の授業実践・・・「絵葉書と切手」【中B－(9) 友情・信頼】

第3学年では、「絵葉書と切手」を教材として選んだ。本教材は、仲良しの友達から届いた定形外郵便物の未納不足について、本人にそのことを知らせるべきかどうか迷う主人公ひろ子の気持ちについて考え、自分ならどうするか考えられる教材である。「教えるべき」と言う兄の意見と、「教えない方がよい」という母の意見の間で思い悩んだ末、ひろ子は教えることを選択する内容である。教材をすべて読み上げてしまうと、子どもたちは主人公がとった行動が正しいと思ってしまい、「自分だったらどうするか」「人としてよりよく生きるためにはどうすべきか」考えるまでには至らないと考えた。そこで、主人公ひろ子が最後に教えることを選択した場面を付箋で隠し(写真5)、ひろ子が思い悩んでいる場面までを読み、「自分だったらどうするか」考えさせるようにした。そうしたことで、ひろ子が最後に選択した行動に左右されることなく、自分の生活や経験を振り返りながら、友達のことを考えて言いづらいことを教えるかどうかを考えることができた。



写真5 付箋で隠した教材

③ 第4学年の授業実践・・・「心と心のあく手」【中B－(6) 親切・思いやり】

第4学年においては、親切・思いやりの教材から、登場人物が足の不自由なおばあさんに対する「本当の親切」について「考える道徳」「議論する道徳」を目指して、「心と心のあく手」を教材として選んだ。この教材は、登場人物の心情を理解することで、道徳的価値に迫る指導が一般的である。しかし、問題場面がはっきりしており、主人公のはやとが行動するか迷ったり悩んだりする葛藤があり、問題解決を図る必要があり、子どもたちが共感しやすい教材である。主人公が問題を解決する前に、子どもたちが自分の経験やこれからの自分と結び付けて、自分なりの解決方法を学んでいく問題解決的な学習していくことが、道徳的判断力、道徳の実践力を養うことになると考えた。そこで、教材を最後まで読むのではなく、問題場面までを提示し、「自分だったらどうするか」を考えるようにした。そうすることで、主人公がとった行動に左右されることなく、自分の経験を基に考えることができた。

④ 第6学年の授業実践・・・「ロレンゾの友達」【高B－(10) 友情・信頼】

第6学年においては、言いにくいことでも言うてあげることができるよう互いを理解し信頼できるような真の友情について考える道徳・議論する道徳を目指して、「ロレンゾの友達」を教材として選んだ。この教材は、三人の登場人物が友達のためになることは何かを深く考える内容である。しかし、長文であり、内容理解までに時間がかかるため、事前に教材を配布し家庭に持ち帰り、自分だっ

たらどの登場人物の意見と近いのか、なぜそう思うのか、事前に考えてくるようにした。事前に読むことで、話の内容を理解し、登場人物の気持ちを自分なりに考えるとともに、自分がどの登場人物の考えに近いのかじっくり考えることができた。また、保護者と共に読むことも推奨した。

⑤ 第6学年の授業実践・・・「つかの間の出来事」【高Dー（22）よりよく生きることの喜び】

第6学年において、新学習指導要領で付加された内容項目「よりよく生きることの喜び」の教材開発、授業実践を行った。中学校1年生の副読本「かげがえのないきみだから」より「つかの間の出来事」を選定した。本屋さんの本の表紙を破ってしまい、「店員さんに正直に話すか」「そのまま黙っておくか」と主人公が葛藤し、悩んだ末に自分に正直でありたいと思い、店員さんに謝るという内容である。子どもの実態を考慮して、自分のこととして捉えやすく、自分だったら「正直に謝るか」「そのまま黙っておくか」、ネームプレートで立場を明確にし（写真6）、議論しやすい教材を選んだ。



写真6 自分の立場を明確にしている場面

（2）方法を拓く

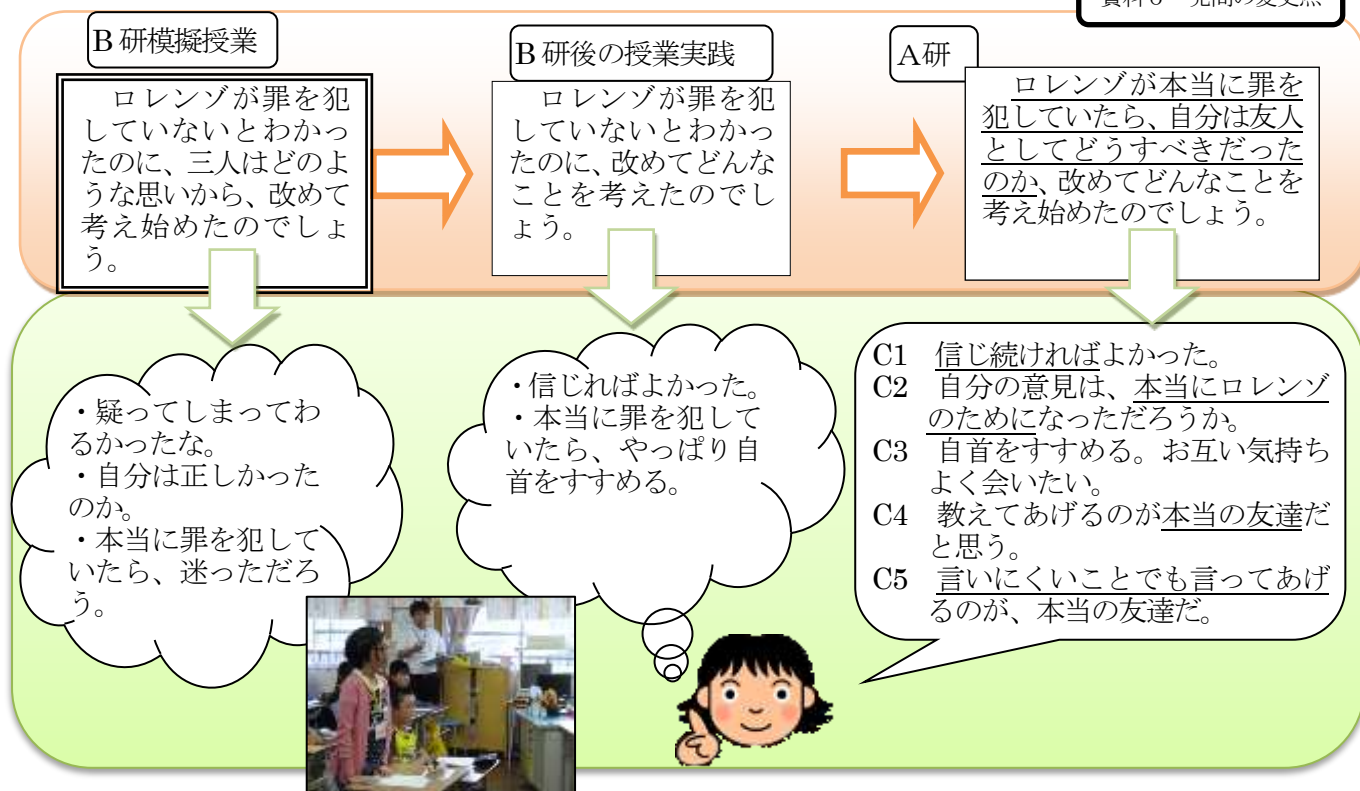
手立て2・・・発問の工夫

子どもたちが自分とのかかわりで道徳的価値を理解したり、自分を見つめたり、物事を多面的、多角的に考えたりするための思考や話し合いを深めるためには、発問が重要である。考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的、多角的に考えたりする発問などを心掛けることが大切である。子どもたちがより深く考えることができる発問を工夫するために本校では、B研の模擬授業、B研後の授業実践、A研と協議を重ね、発問を精選し、工夫した。

① 第6学年の授業実践・・・「ロレンゾの友達」【高Bー（10）友情・信頼】

第6学年の実践では、B研模擬授業での発問、B研後の授業実践での発問において、課題が出たため、A研では発問を下記のように変更した。（資料7）

資料6 発問の変更点



資料6にあるように、B研模擬授業では、中心発問として「ロレンゾが罪を犯していないとわかったのに、三人はどのような思いから、改めて考え始めたのでしょうか。」として、ロレンゾが罪を犯していないのに、また考え始めたのは、「疑ってしまって悪かった。」という反省の思い、「自分は正しかったのか。」という迷いを表す発言が出た。協議の結果、子どもの思考を考慮して「ロレンゾが罪を犯していたら、自分は友人としてどうすべきだったのか、改めてどんなことを考えたでしょう。」と改善した。改善後は、「本当に罪を犯していたら、やっぱり自首をすすめる。」という友達のことを考えた思いが表れた。しかし、活発な意見は出なかった。そこで、本時では「ロレンゾが本当に罪を犯していたら、自分は友人としてどうすべきだったのか、改めてどんなことを考え始めたのでしょうか。」と変更した。これは、自分と登場人物を重ねて考えられるような発問であり、「友人としてどうすべきか。」と問うことで、ねらいである「真の友情」についてまで深く考えることができる発問であると考えた。この発問に対し、C1「信じ続ければよかった。」という発言から、相手の立場に立って相手のことを真剣に考えることの大切さに気付くと共に、C5「言にくいことでも言ってあげるのが、本当の友達」という発言から、「真の友情とは何か」深く考えることができた。

手立て3・・・言語活動の充実（話し合い活動、表現活動、書く活動）

子どもたちがより自分のこととして課題をもち、深く考える道徳、議論する道徳を目指すためには、言語活動の充実が欠かせないとする。そこで、どの学年も言語活動の充実に力を入れて授業実践を行った。本論文ではその中でも話し合い活動、表現活動を中心に述べることにする。

① 第1学年の授業実践・・・「あいさつで しあわせに」【低B－（8）礼儀】

第1学年では、ポンタくんが会う人とあいさつを交わす場面での役割演技を取り入れた。B研では、校長先生とだけ役割演技を行った。しかしより身近なものと感じさせるため、本時では、子ども同士であいさつを交わす場面を作った。一人がポンタくんになってペープサートを持ち、あいさつをし、次は役割を交代してあいさつの練習をした。初めは恥ずかしそうにしていた子どもも、嬉しそうに「さようなら、またね。」「うん。さようなら。」とあいさつをしていた。（写真7）別のペアは、バイバイだけでなく資料7のように会話を付け加え、楽しそうにあいさつをしていた。役割演技を取り入れることで、自分と主人公を重ね、日常会話も付け加えることもできた。先生方やスクールヘルパーさんとあいさつを交わす場面（写真8）では、いろいろな先生方のところに行って、自分たちから「こんにちは」とあいさつをすることができた。名前を言って、お辞儀をしている子どももいた。「あいさつをしてどんな気持ちになったか」の問いに、「気持ちが弾んだ。」「もっと、仲良くなりたいと思った。」「にこにこしていたから私もにこにこになった。」などが聞かれた。当たり前のようをしていたあいさつだが、あいさつをしたりされたりした時の気持ちを考え、発表することで相手も同じように嬉しい気持ちになったことを実感できたからだと言える。



写真7 友達同士での役割演技

C1 今日は、楽しかったね。
C2 うん、ドッジボール楽しかったね。
C1 また、一緒にしようね。
バイバイ。
C2 バイバイ。

資料7 ポンタと友達の会話



写真8 スクールヘルパーさんとのあいさつ

② 第3学年の授業実践・・・「絵葉書と切手」【中B－（9）友情・信頼】

第3学年では、展開前段に郵便料金の不足についてひろ子は正子に教えるべきかどうか、自分の考えを黒板にネームプレートで提示し（写真9）自分の考えを明確にさせ、選択した理由を自分の考えを広げ深めることができるように小グループでの話し合いを行った。（資料8）

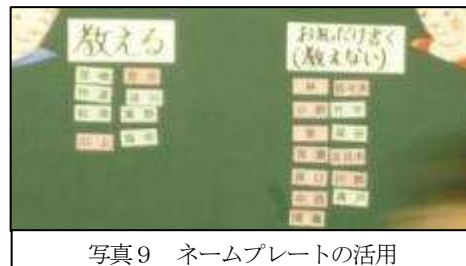


写真9 ネームプレートの活用

Aグループでの話し合いにおいて、C1は「お友達だもん。」という考えから、「友達だから嫌なことをいっても怒らないで分かってくれるから。」と自分の考えを深め、さらにワークシートに「理由は、友達は信頼できる人だから。」と書き足していた。Bグループでは、C2は「いっぱい遊んだから伝えよう。」から「いっぱい遊んだり、けんかしたりして分かり合えているから。」と自分の考えを広げることができた。こうしたことから、小グループでの話し合いにおいては、ネームプレートで自分の考えを明確にしたことで積極的に意見を述べることもできた。また、多様な見方や考え方に触れさせることで、自分の考えを広げ深め、道徳的価値を高めることにもつながったといえる。

資料8 小グループでの話し合い活動の発言

Aグループ

C1「私は教えるよ。だって、お友達だもん。」
 C「何で？」
 C1「え～、わからん。」
 C「友達だったら何でわかってもらえるん？」」
 C1（しばらく考えて）「友達だから、嫌なこと言ってもおこらないで分かってくれるから。」

Bグループ

C2「いっぱい遊んだから伝えよう。」
 C「何で、いっぱい遊んだから伝えるん？」
 C2「1年生の時から遊んだから。」
 C「何で、1年生の時から遊んだらいいの？」
 C2「いっぱい遊んだり、けんかしたりしているから、分かり合えてるから。」

③ 第4学年の授業実践・・・「心と心のあく手」【中B－（6）親切・思いやり】

第4学年では、自分の考えを明確にし、一人一人がしっかりと意見をもって学習に臨むため、ネームプレートを活用して一人一人が「自分だったらどうするか」を考え、足が不自由で歩く練習をしているおばあさんに「声をかける」か「声をかけない」のか黒板に提示し自分の考えや友達の考えを可視化できるようにした。その後、B研の模擬授業では学級全体で話し合いをした。しかし、さらに子どもの意見を引き出す方法はないかと協議し、それぞれの意見で席を分け、立場討議を行うことにした。



写真10 立場討議

B研後の実践で子どもたちは活発に意見を出すことができたので、A研でもおばあさんに「声をかける」か「声をかけない」のか、その理由を立場討議をすることにした。（写真10）立場討議をすることで、自分の考えを発表すると共に、自分の考えに近い友達の意見や考えの違う友達の意見を聞き、さらに自分の意見を話すことにより、より考えを深めることができた。

資料9は、立場討議での子どもの発言である。「声をかけない」立場の子どもも「声をかける」立場の子どもも共に、おばあさんのことを思い、発言していた。「声をかけない」ことも「声をかける」こともどちらも親切であることに気付くことができた。

声をかけない立場

- ・ おばあさんを応援したい気持ちは同じ。でも一回断られたから、声をかけにくい。
- ・ 歩く練習をしてほしい。
- ・ おばあさんの足が治ってほしい。
- ・ 声をかけて応援するのもいいけど、おばあさんは頼らずに一人でがんばりたいんじゃないかな。集中したいのかもしれない。
- ・ 声をかけなくても、近くで見守っていたら助けられる。

声をかける立場

- ・ おばあさんに声をかけて、応援したい。
- ・ 荷物を持ってあげるのではなく、「頑張ってください。」と言ったらおばあさんは元気になると思う。
- ・ 「この前はすみません。」と声をかけるのもいいかも。
- ・ 近くにいたら、もしおばあさんがこけそうになったら助けられる。
- ・ おばあさんも安心できるはず。
- ・ 声をかけないと悪い気になる。

④ 第5学年の授業実践・・・「きまりは何のために」【高C - (12) 遵法精神, 公徳心】

第5学年では、B研の展開前段で役割演技を取り入れて中心発問の後、話し合いをすることになっていた。勝手な行動や違反をしている登場人物、明と鉄男の役とこの二人と同じ学級の子も役になり役割演技をした。その後、中心発問「あなたがこの学級の子もとして話し合いに参加していたらどのような発言をしますか。」に対して、「きまりは〇〇のためにあり、その理由は〇〇だから。」とそれぞれの立場に立って意見をもち、話し合いをするとグループでの話し合いを進めやすいのではないかと考えた。しかし、B研で行ってみると、意見が活発に出ず、役割演技をすることに意味があるかどうかという疑問が生じた。そこで、B研後の実践、A研では「もしこの学級の子もだとしたら」という立場に立ってそれぞれの子もが考える模擬学級会という形態をとった。(写真11)



写真11 模擬学級会

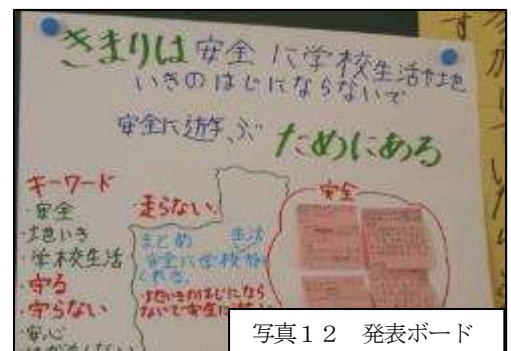


写真12 発表ボード

まず、「きまりは何のためにあるか」自分で考え、付箋に書くようにした。その際「守れたきまり」「守れなかったきまり」について自分の生活を振り返り考えさせるようにした。また、「なぜそう思うのか」考えさせた。司会役を中心に話し合いを進めた。書記が発表ボードに一人一人の考えを書き込んだり、似ている言葉やキーワードを書いたりした。(写真12)さらに、模擬学級会の後、学級全体で話し合った。役割演技から模擬学級会に改善することで話し合いが活発に行われるとともに、登場人物と同じような体験や自分の生活を基に、一人一人が自分自身を見つめ直しながらしっかり考えることができ、また、その思いを述べることでできたため、自分の考えを深めることができたと考えた。

② 第6学年の授業実践・・・「ロレンゾの友達」【高B - (10) 友情・信頼】

第6学年では、B研の模擬授業で役割演技(ロールプレイ)を取り入れて話し合いをすることになっていた。自分の意見とは関係なく、グループでロレンゾの友達、アンドレ、サバイユ、ニコライの立場に分かれ、それぞれの立場に立って話し合うことで、多様な感じ方

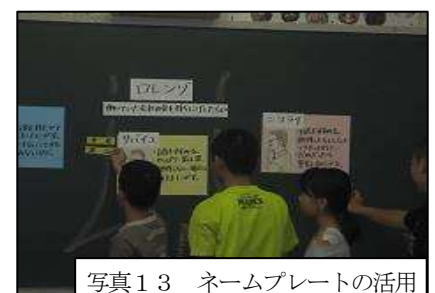


写真13 ネームプレートの活用

や考え方に接することができると思ったからだ。しかし、B研で行ってみると、自分の意見と全く違う登場人物の立場に立つのは難しいと感じた。そのため、協議の結果、B研後の実践、A研では、ネームプレートを活用して自分の考えを明確にした（写真13）後に、ペアで話し合いをさせた。（写真14）自分の考えに近い登場人物の名札を首からかけ、なぜその登場人物の考えに近いのか理由を話し合うことにした。条件としてまず、自分と同じ考えの人と話し合い、その後、違う考えの人と話し合った。また、途中で意見が変わった子どもは、名札を取りかえてもよいことにした。意見が変わった子どもには、自分の意見が変わった理由を話すようにした。ペアでの話し合いの後、話し合っただけのことを学級全体に紹介するようにした。資料10のように役割演技からペアでの話し合いに改善することで、登場人物の思いと自分を重ね、自分のこととして課題をもって話し合いをすることができ、話し合いが活発化した。

①僕は、ニコライの考えに近いよ。やっぱり、友達でも「いけないことはいけない」と教えてあげないといけないと思う。

③その考えもわかるけど、本当にロレンゾのことを考えたら、教えてあげた方がロレンゾのためになると思う。



写真14 ペアでの話し合い

資料10 ペアでの話し合いでの子どもの発言

②僕は、迷っているけど、サバイユの考えに近い。だって、いけないことはいけないけど、ロレンゾには何かわけがあると思うし、ロレンゾの気持ちも考えないといけないのかなと思う。

④そっか。ロレンゾのことを一生懸命考えたらそうなのかな・・・。

手立て4・・・板書の多様化、構造化

板書は、子どもたちにとって思考を深める重要な手がかりとなり、教師の伝えたい内容を示したり、学習の順序や構造を示したりするなど、多様な機能をもっている。そこで、板書を多様化、構造化することは今後道徳科になる上で大変重要なことである。

① 第1学年の授業実践・・・「あいさつで しあわせに」【低B－（8）礼儀】

第1学年では、子どもたちにポンタくんの一日のあいさつを見てみようという意欲をもたせるために、教材を板書に地図のようにして提示し（写真15）、登場人物や吹き出しを増やしていくように工夫した。ポンタくんのあいさつの言葉、動作、登場人物の表情などが、場面絵で分かりやすく描かれているので、子どもたちも板書を見ながら吹き出しを考えたり、あいさつの言葉の違いなどを感じ取ったりしやすかったと考える。中心発問の「あいさつをしたりされたりしたとき、どんな感じがしましたか。」という問いをまとめる時には、B研模擬授業後の授業実践では、子どもたちの発言を板



写真15 地図のような板書



写真16 B研後の授業実践での板書



写真17 板書に活用した心のリボン

書しただけだった（写真16）。しかし、あいさつをする人とされた人の心の結びつきを強調したかったので、子どもにハートのカードを持たせ、あいさつをすると、二人の心が近づきリボンで結ばれる様子を表した。（写真17）

言葉だけでなく、心の動きを教師がリボンで実際に結び、視覚的に訴えることで、「あいさつは心のリボン」という道徳的価値に迫ることができた。

② 第6学年の授業実践・・・「ロレンゾの友達」【高B－（10）友情・信頼】

第6学年では、ロレンゾのことを真剣に考えていることをイメージさせたかったので、B研の模擬授業、B研後の授業実践では、ロレンゾの周りを友達が囲んでいるような板書計画をした。（写真18）しかし、授業を行う上でまとめていくス



写真18 B研、B研後の授業実践の板書

ペースが限られていたり、三人の意見の違いが強調されてしまい、三人ともがロレンゾのことを真剣に考えていることに結び付けたりするのが難しいと感じた。そのため、A研では、樫の木の下で三人が真剣に話し合い、



写真19 A研の板書

意見を交換したことがわかるような板書計画を立てた。さらに、樫の木の葉には、「ロレンゾが本当に罪を犯していたら、自分は友人としてどうすべきだったのか、木の実にみたてたハートの色画用紙には、生活を振り返る場面で中心発問である「今日の学習を通して、『友達』について考えたことを書いてみましょう。」に対する子どもの発言を書くようにした。（写真19）

2 体験活動を生かした指導方法の工夫

(1) 人間を拓く

手立て5・・・家庭や地域社会との連携を図った学習指導

① 第1学年の授業実践・・・「あいさつで しあわせに」

【低B－（8）礼儀】

第1学年では、スクールヘルパーの方と見守り隊の方に授業に参加していただき、子どもたちの普段のあいさつの様子について話していただく場を設定した。スクールヘルパーの方、見守り隊の方がどんな気持ちであいさつをしているか、また、子どもたちからのあいさつで何を感じているかなどを語っていただいた。授業後、話をしていただいたお礼に感謝の手紙を書いて渡した。（写真20）「いっぱいあいさつをすると、ぼくも元気になって、気持ちがおちつきしました。」「もっと、元気になってもらいたいから、いいあいさつをします。」などこれからは気持ちのよいあいさつを実践していこうとする意欲を高めることができた。



写真20 お礼をする子ども

写真 2 1 挨拶運動

おうちの人のことは(1週間のがんばりを見て、感想をお願いします。)

おのれんたけは、とほりかおほおれんに、しる次から「おほやくでさいます。」と
いって、いかに、せいじよりしたと、いひました。えがおが、すてきでした。
あいさつは、たじですわね。

写真22 保護者の感想

(2) 時間を拓く

① 道德教育全体計画別葉作成

[illegible]

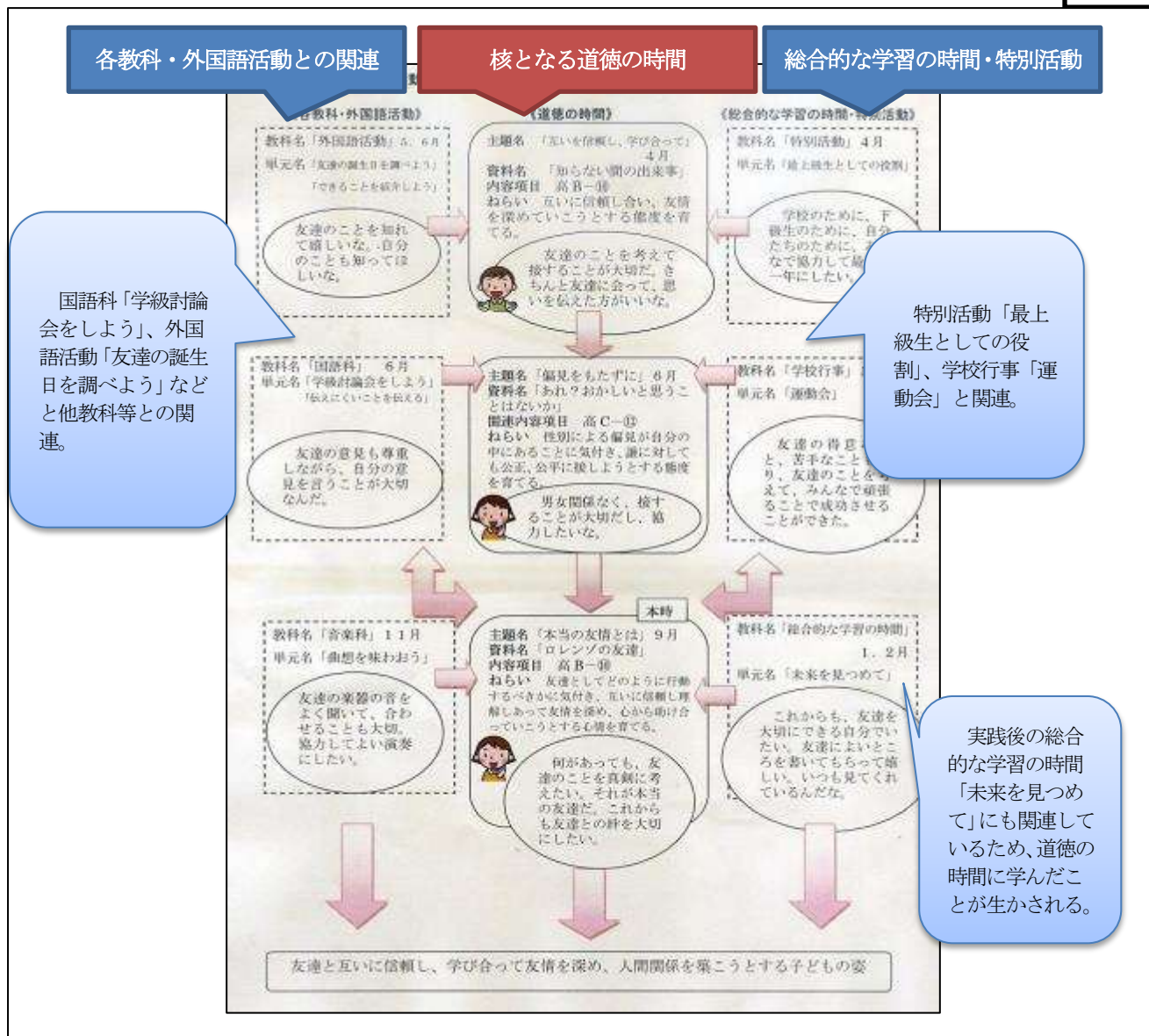
- 16 -

② 構想図

道徳教育全体計画別葉に基づいて、学習指導案には、構想図を載せるようにした。資料12は、第6学年の例である。「各教科、外国語活動との関連」、「総合的な学習の時間、特別活動との関連」の面から、「B－（10）信頼・友情」に関する内容をとりあげている。

これは、教師が他教科等との関連を意識した指導を行うためであり、子どもたちがこれまで他教科等で学習してきたことを生かして、課題を深く考える手がかりとするためである。

資料12



③ 第2学年の授業実践・・・「生きているって素晴らしい」【低D－（17）生命の尊さ】

第2学年では、提示した教材に空欄を作り、その中に「生きている」からできると思うことを入れるようにした。「生きている」ということを自分のこととして考えられるようにするため、真剣に何かに取り組んでいる学校生活の写真を提示した。写真を見ながら、「生きている」ことを身近なこととしてとらえ、自分の考えや思いを書くことができた。プレゼンテーションは消えてしまうが、写真は掲示すると残るため、子どもたちの振り返りはしやすかった。

(写真23)



写真23 生活を振り返る場面

④ 第4学年の授業実践・・・「心と心のあく手」【中B－（6）親切・思いやり】

第4学年では、2学期の総合的な学習の時間で、「福祉体験学習」を行った（写真24）「いろいろな障害をもっている方々の不便さ」がどのようなものなのかを実際に体験するものである。内容項目が「B－（6）親切、思いやり」である本教材には高齢者、前に学習した「心の信号機」には視覚障害者、後に学習した「やさしいなみだ」には足が不自由な車いすの方というように、福祉体験学習で子どもたちが体験した障害をもつ人物が登場する。体験学習をしたことで「相手の気持ちに寄り添える心」が育ったと考えた。



写真24 総合的な学習での高齢者体験

⑤ 第5学年の授業実践・・・「きまりは何のために」【高C－（12） 遵法精神、公德心】

第5学年では、国語科「考えを明確にして話し合い、提案する文章を書こう」の学習では、話題を決めて収集した知識や情報を関連付けたがいの立場や意図をはっきりさせながら計画的に話し合うことを通して、自分たちの身の回りにある問題について調べ、解決することができるようにするという学習をしてきた。「委員会でこんな活動をしたい。」という提案書を書いた際には、グループで司会者を決め話し合いを行った。よりよい話し合いができるように考えたり意見が対立した時には助け合ったりして、話し合いをしていたので、模擬学級会はスムーズにできたといえる。（写真25）



写真25 国語科の話し合い活動

VII 研究の成果と課題

1 研究の成果

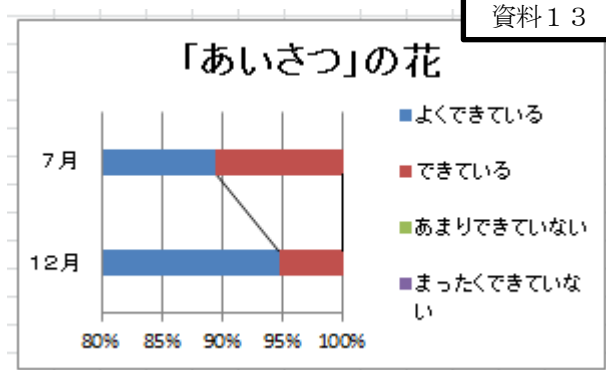
（1）手立ての有効性について

手立て1・・・教材選定・教材提示の工夫

本校の学校教育目標の指標である「あなたの花」（㊦いさつの花・㊦かよしの花・㊦いせつな命の花）に関連する内容項目【礼儀】、【友情・信頼】、【思いやり・親切】、【生命の尊さ】の授業を実施した。「考える道徳」「議論する道徳」を目指し、子どもの実態を考慮しながら、立場を明確にして議論できるような教材を選定することができた。また、教材の提示を工夫し、子どもたちが興味関心をもって授業に臨むことができた。

① 第1学年の授業実践・・・「あいさつで しあわせに」【低B－（8）礼儀】

第1学年では、「B-（8）礼儀」を取り扱った。7月と12月に行った道徳アンケートでは、「あいさつができていますか」という質問に対して、7月、12月ともにほとんどが「よくできている」「できている」であった。資料13にあるように12月には、「よくできている」と答えた子どもが95%に増加した。これは、第1学年の実践で「あいさつ」について学んだこととその後、登下校での見守り隊の方へのあいさつ、学校でのあいさつ運動などを日常的に継続することができた成果であると考えられる。先生方に対して、



立ち止まってお辞儀をする姿も見られるようになった。また、学校の廊下などで出会うお客さんや上級生にもあいさつができるようになり、限られた人だけでなく、出会う人に気持ちのよいあいさつができるということは、道徳的实践意欲が育ってきた成果である。

また、第1学年は、教材を提示する際には、黒板を地図のようにし、ペープサートを利用して行った。子どもたちは意欲的に授業に臨むことができた。抽出児Aは、1学期から道徳の時間は、話を集中して聞くことが難しく、自分の考えを発表することがなかった。しかし、本実践では、最後まで集中して考えることができ、生活を振り返る場面では「朝学校の近くのおばさんといつもあいさつをしていたら、友達になった。」と発表することができた。また、授業後、友達のあいさつの上手なところを見付け、カードに楽しんで書く姿が見られるようになった。学級で「あいさつの木」をいっぱいになしよと率先して取り組む姿も見られた。このことから分かるように、子どもたちが興味をもって授業に臨むことができる教材を選定したり、教材の提示を工夫したりすることは、子どもたちの道徳性を養う上で大変重要であると考えられる。

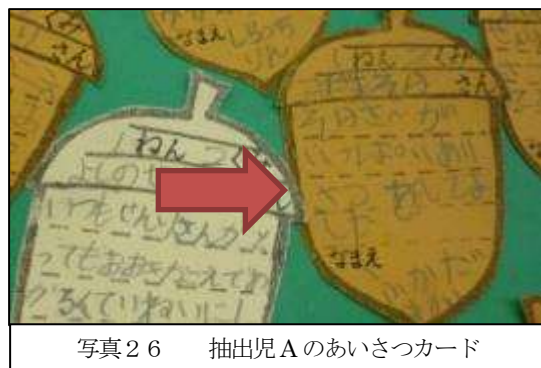
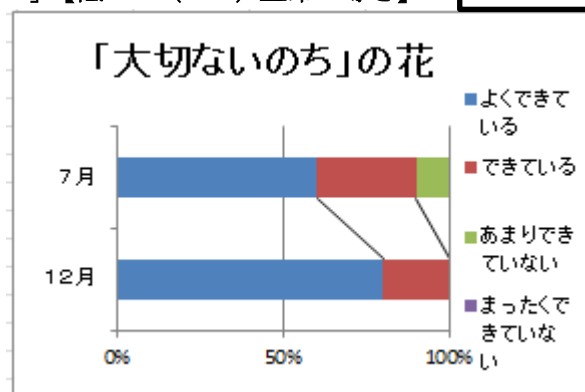


写真26 抽出児Aのあいさつカード

② 第2学年の授業実践・・・「生きているってすばらしい」【低D-（17）生命の尊さ】

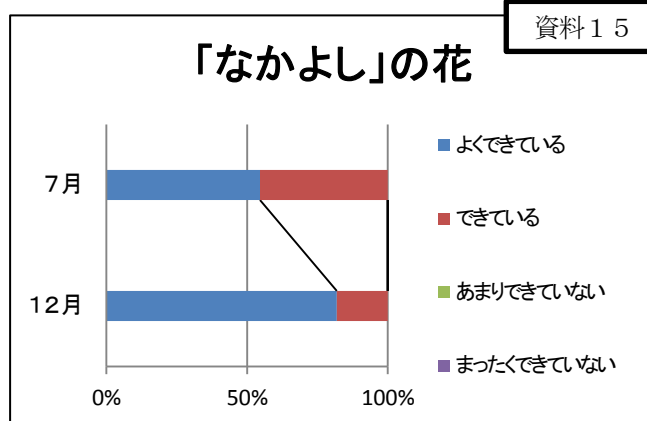
資料14

第2学年では、「D-（17）生命の尊さ」を取り扱った。生命の尊さに関する「大切な命の花について振り返ったり、大切にしようと思ったりしていますか」という質問に対して、「よくできている」と答えた子どもが7月に比べると、大きく増加している。（資料14）これは、実践の中で、生きることの素晴らしさについて考え、生命の尊さを自分のこととして捉えることができたためであると考えられる。



③ 第3学年の授業実践・・・「絵葉書と切手」【中B-（9）友情・信頼】

第3学年では、「B-（9）友情・信頼」の内容を取り扱った。3年生の道徳アンケート（資料15）では、「友達を大切にしたり、仲良くしたり、親切にしたりすることができていますか」という質問に対して、すべての子どもが「よくできている」「できている」と答えている。また、7月に比べると12月は「よくできている」と答えた子どもが90%を超えている。このことから、本実践において、「友達の大切さ」についてしっかりと考えることができたと考えられる。さらに、教材提示の工夫として、主人公ひろ子が最後に教えることを選択した場面を付箋で隠し、ひろ子が思い悩んでいる場面までを読み、自分がひろ子の立場ならどうするかを考えるようにした。そうしたことで、



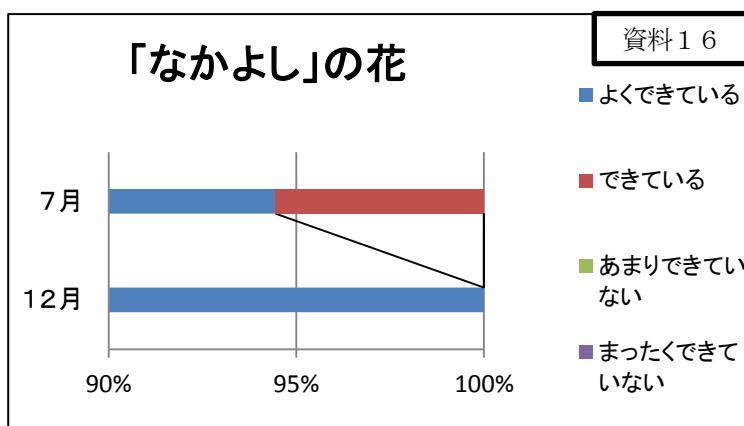
資料15

ひろ子が最後に選択した行動に左右されずに、自分自身のこととして捉え、自分の生活や経験を振り返りながら友達のために言いづらいことを教えるかどうか考えることができたためである。

④ 第4学年の授業実践・・・「心と心のあく手」【中B－（6）親切・思いやり】

第4学年でも主人公がおばあさんに声をかけようかどうか迷っている場面までを提示し、自分だったらどうするか、自分自身のこととして課題をもち、主人公の行動に左右されることなく自分の考えを明確にすることができた。

第4学年では、「B-（6）思いやり・親切」を取り上げた。4年生の道徳アンケート（資料16）では、「思いやり、親切」に関する質問「友達を大切にしたり、仲良くしたり、親切にしたりすることができていますか」に対して、12月には「よくできている」と答えた子どもが100%になった。これは、実践を通して、親切について深く考えた成果であるといえる。



手立て2・・・発問の工夫

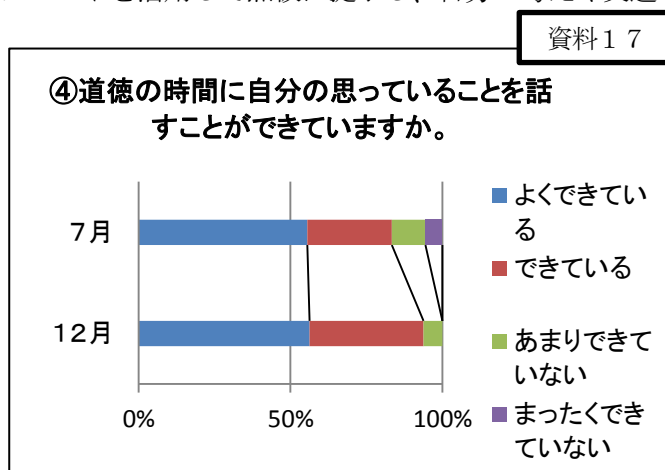
本研究では、子どもたちが自分自身のこととして、考える必然性のある発問、自由な思考を促す発問を心がけてきた。また、B研の模擬授業、B研後の実践、A研と協議を重ねていき、子どもの実態を考えた発問に練り上げていくことができた。

手立て3・・・言語活動の充実（話し合い活動、表現活動、書く活動）

様々な形態の話し合い活動、表現活動、書く活動を取り入れることで、「自分だったらどうするか」考え、自分の考えを明確にすることができ、ねらいとする価値に迫ることができた。

① 第4学年の授業実践・・・「心と心のあく手」【中B－（6）親切・思いやり】

4年生は、一人一人が、「自分ならどうするのか」考え、足が不自由で歩く練習をしているおばあさんに「声をかける」か「声をかけない」かネームプレートを活用して黒板に提示し、自分の考えや友達のを考えを可視化できるようにした。その後、立場討議を行い、自分の考えを発表すると共に、自分の考えに近い友達の意見や考えの違う友達の意見を聞き、さらに自分の意見を話すことにより、より考えを深めることができた。7月と12月に行ったアンケート（資料17）からも分かるように子どもたちは、「自分だったらどうするか」と自分の考えを話すことが「よくできている」「できている」と答えた子どもが90%を超えている。これは、自分の考えを友達に聞いてもらえるという実感があるからであると考えられる。また、日頃から、話し合い活動を多く取り入れて授業を実践してきたことで、自分の考えに自信をもって話してきた成果であると考えられる。

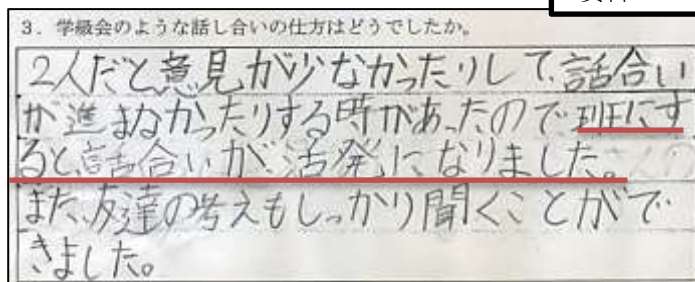


② 第5学年の授業実践・・・「きまりは何のために」【高C - (12) 遵法精神, 公徳心】

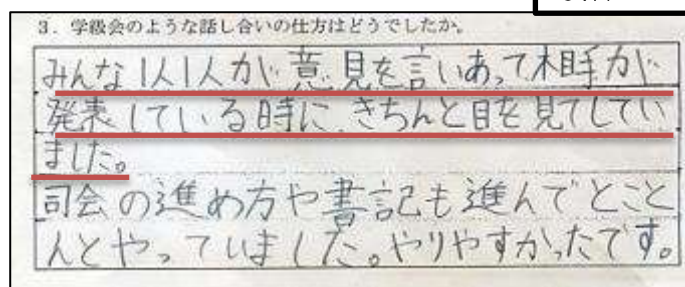
第5学年では、模擬学級会を取り入れた。実践後に感想を書かせると、

「グループで話し合うと、話し合いが活発になった」と書いていた。(資料18) 4～5人の小グループで話し合うと、共感したり、質問し合ったりすることによって話し合いが活発になり、子どもたち自身も楽しいと感じているようである。また、「みんなが意見を言い合っていて、相手が発表しているときにきちんと目を見てしていました。」という感想から(資料19)、一人一人の意見をしっかりと聞き、話し合いに積極的に参加していたことが分かる。これらのことから、自分の意見をしっかりともち、付箋に書かせてから模擬学級会をすることにより、友達の意見を聞き、自分の考えと比べながらよりよい考えを導き出していくことができたと考える。

資料18



資料19



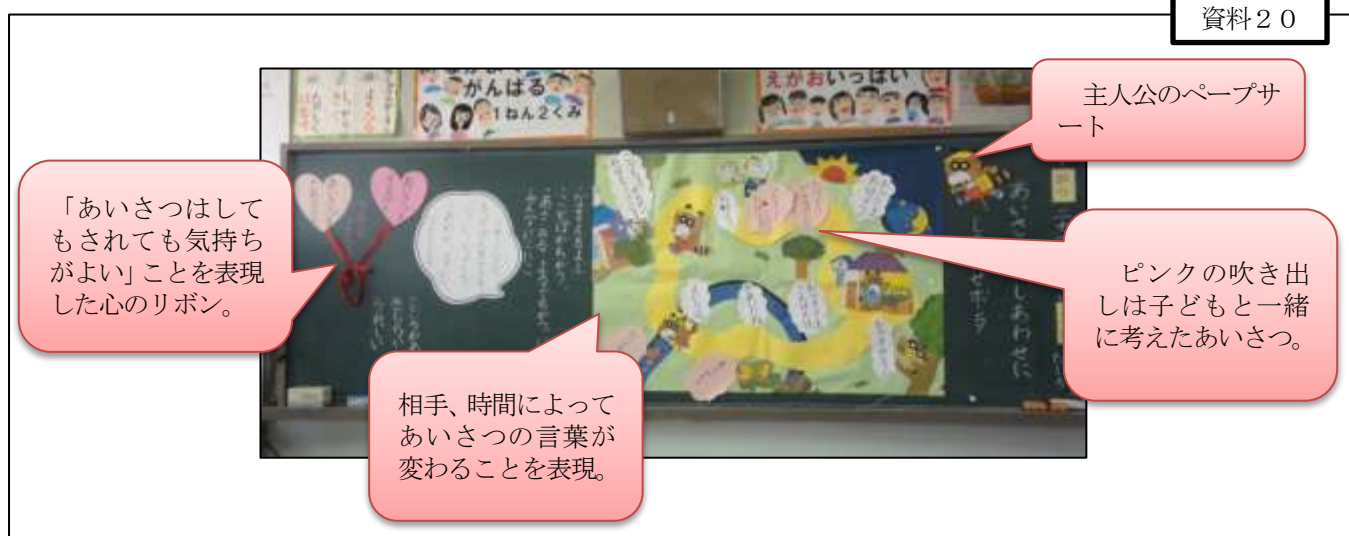
手立て4・・・板書の多様化、構造化

子どもたちが黒板を見て、自分と主人公を重ね、自分自身の課題としてとらえ、考えることができるような板書作りを行うことができた。

① 第1学年の授業実践・・・「あいさつで しあわせに」【低B - (8) 礼儀】

第1学年の実践では、黒板を地図のようにして子どもと一緒に板書を作りあげていくことで、子どもたちは興味をもつことができた。また、黒板の地図の上をペープサートを動かしながら考えていくうちに、地図の中に自分もいるかのように感じる事ができたと考える。(資料20)

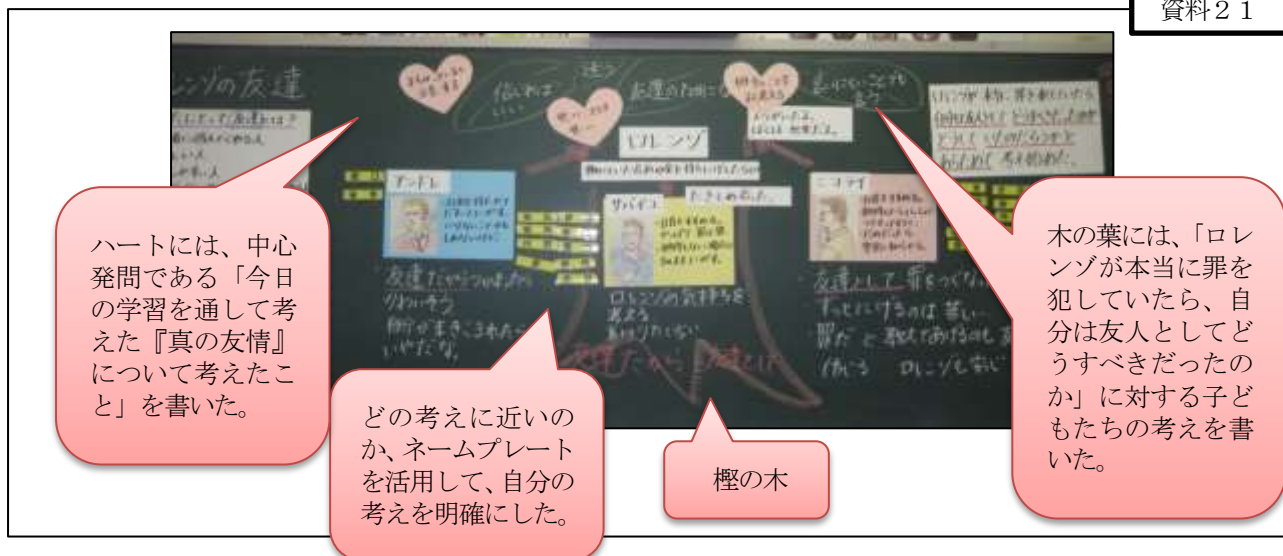
資料20



② 第6学年の授業実践・・・「ロレンゾの友達」【低B－（10）友情・信頼】

第6学年の実践では、樫の木の下でロレンゾの友達三人がロレンゾのことを話し合っている場面を黒板に表現した。三人の友達と自分を重ね、「自分だったらどうするか」考えることができた。

資料2 1



手立て5・・・家庭や地域社会との連携を図った学習指導

家庭や地域との連携を図り、学校と家庭・地域が同じ価値観を共有することにより、道徳科の学習がより効果的な学びの場となった。授業参観や、授業参観ではない通常の道徳授業を参観してもらったり（写真27）、アンケートに協力してもらったり（写真28）と家庭と連携することで、学校で学んだ道徳的価値のよさを地域や家庭で理解してもらい、価値付けてもらうことが大切である。道徳ノート等を活用し、道徳の学習内容を保護者と話し合ったり、家庭や地域での実践を賞賛してもらったりする等、家庭や地域からの価値付けにより実践意欲を高めることができた。



写真27 保護者と話し合う様子

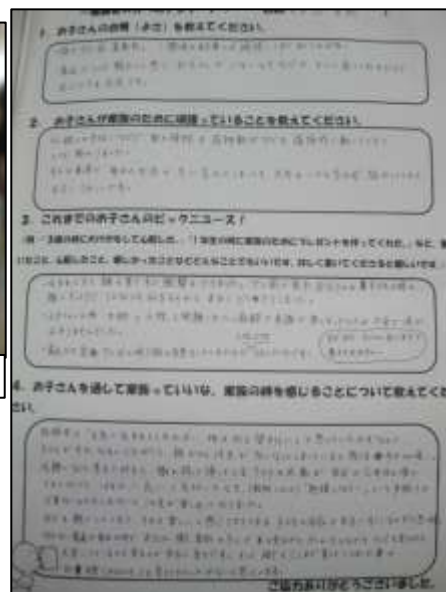


写真28 保護者アンケート

第1学年の実践においては、子どもたちは地域の見守り隊の方、スクールヘルパーの方の話を真剣に聞いていた。授業後、子どもたちと見守り隊の方、スクールヘルパーの方との結びつきがさらに強くなった。見守り隊の方と下校時に蛍の話をする子ども、廊下でスクールヘルパーさんとハイタッチする子どもなど、あいさつから絆の深まりをうかがわせた。また、家庭での「あいさつカード」の取組で、保護者の意識も高まったと考える。保護者の感想の中には、「もっと笑顔で言ってほしい。」「だんだん上手になってきました。これからも、この調子で続けてね。」という励ましの言葉もあり、その後の子どもたちの実践意欲へとつながったと考える。

手立て6・・・各教科等との関連を図った学習指導

道徳科と各教科等は、相互に関わり合うことで、道徳性を高めることができる。道徳科と各教科等との関連を図ることで他教科、総合的な学習の時間、特別活動の中で感じたこと、学んだことを道徳科の話合いに生かしたり、子どもたちが体験したことを基に道徳科において考えを深めたりすることができた。

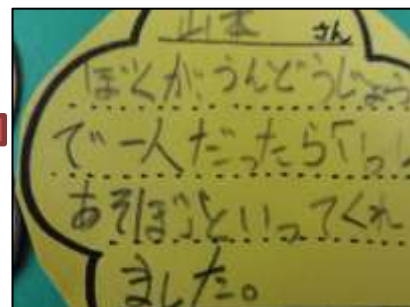
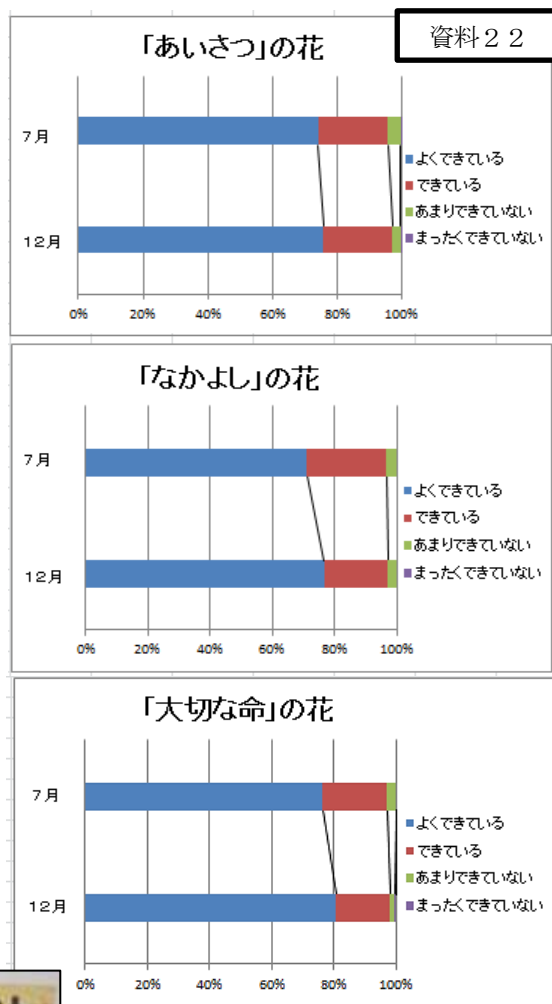
第4学年の実践では、道徳教育全体計画別葉を作成することで、総合的な学習の時間と本実践の授業計画を立てることができた。総合的な学習の時間で行った福祉体験で高齢者体験をしており、そこで経験したことを道徳科の学習の中で生かすことができた。高齢者体験で足や腕に重りをつけて歩いたり、段差が上がったりする経験により、重い荷物を持って歩くことが大変であることを学んでいた。そのことを生かして、道徳の実践では、足の不自由なおばあさんに対して、どのように接したらよいのか、主人公と自分を重ねて考えることができたといえる。

(2) 子どもの変容について

本校の学校経営の重点目標「あなたの花」(㊦いさつの花・㊦かよしの花・㊦いせつな命の花)に関連した内容項目の実践を行ってきた。資料22のように7月と12月に行った道徳アンケートでは、これらの内容項目に関する数値が全てあがっていた。また、学校全体で取り組んでいる「あなたの花をさかせようプロジェクト」では、友達のよいところを見つけて花に書く活動をしている。内容は、「〇〇くんは、学校から帰る時に見守り隊の人に大きな声であいさつをしていました。」「〇〇さんは、友達がけがをした時に保健室に連れて行ってあげていていいなと思いました。」「ぼくが運動場で一人だったら『一緒にあそぼう』と言ってくれました。』など、「あなたの花」に関係のある内容を書いている子どもが多かった。(写真29)これは、問題解決的な学習として立場討議、模擬学級会、役割演技、ネームプレートの活用などを取り入れたり、体験的な学習を取り入れたりして、言語活動を充実させることで、子どもが自分自身の問題として課題を捉え、主体的に考えて道徳的価値が深まった結果であると考え。



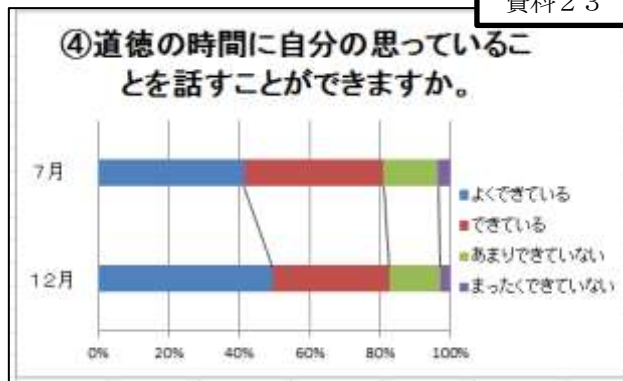
写真29 あなたの花をさかせようプロジェクト



また、自分のこととして課題をもち、深く考える言語活動を充実させることで、資料23のように、「道徳の時間に自分の思っていることを話すことができますか。」という質問に対して80パーセント以上の子供が「よくできている」「できている」と答えた。特に「よくできている」と答えた子供は、7月に比べると12月には大きく数値が伸びている。

以上のようなことから、本研究で道徳の時間に「特別の教科 道徳」を見据え、問題解決的な学習や体験的な学習を取り入れるなど指導方法を工夫したことで、子どもたちが自己をみつめ、道徳的価値や自己の生き方について深く考え、道徳的価値の自覚を深めることができたといえる。

資料23



2 研究の課題

本研究では、大きく2つの指導方法の工夫をもって豊かな心を育む道徳教育の研究を進めてきた。研修の方法として、B研の模擬授業、B研後の実践、A研と協議を重ね、よりよい授業づくりに努め、複数で協議することで様々なアイデアを取り入れて授業実践を行った。しかし、もっと手立てを焦点化する必要があると感じた。今後は、さらに言語活動を充実させ、自己対話や他との交流が生まれるような発問の工夫をし、資料24のように、板書と発問を結んだ指導案を作成しながら研究を進めていきたい。

資料24

板書計画

発問計画

VIII おわりに

資料（教材）を読み、主人公の気持ちを考えるワンパターンの道徳授業や、子どもの反応をすべて右から左へと羅列して書く板書から脱却し、「もっと柔軟な道徳授業を目指そう」と、本校の研究はスタートした。子どもの姿を想定し、模擬授業後喧々諤々と協議し合い、よりよい授業を目指して授業改善を図ってきた。いよいよ道徳科全面実施は、目前に迫っている。本研究を通して私たちは、子どもの豊かな心を育む道徳授業の重要性を再認識することができ、我々の研究心の花も子どもと共に咲き続けている。